

言語能力を統合して解決する問題②（第6学年）

報告者 立石耕一

1 第6学年における問題出題の意図

第6学年の問題数は4問である。各問の内容と意図を下記に示す。

- ・ 問題①は、3人の子どもの発言から資料を根拠に間違いを見いだすものである。先の1、2番目の子どもの根拠は、資料から述べるできない。ただし、間違いであることを資料なしで言うことはできるのである。ここで3つを比較して、資料から確実に間違いであることを述べるができるのは、一人だけである。読解力の側面を問う問題である。
- ・ 問題②は、問題①の理由を記述する問題である。問題①が正答であったとしても、その理由が適切でなければ、本当に内容を正しく読み取ることができていたとは言い難いところがある。問題①同様に読解力の側面を問う問題である。
- ・ 問題③は、資料を読み取り、登場人物が読み取った「困ったこと」を論理的に説明できているものを正答とする。その中でも具体的な数値を基にして記述しているものを◎、具体的な数値がないものを○としている。より明確な根拠を求めるという点で、創造的思考力の側面を問う問題である。
- ・ 問題④は、問いに対してどのような情報を集めればよいか、また、その理由を問う問題である。多面的・多角的に捉えた記述を求めると、他者とのコミュニケーションの側面を問う問題である。

2 調査の結果及び考察

表1 R4年度（6月→11月）とR3年度（6月→2月）における各問題の正答率（%）

年度\問題		①	②	③	④
R4	◎	/		5.1→△17.8	24.5→▲51.5
	○	67.3→73.3	59.2→68.3	80.6→75.2	36.7→30.7
	△	/		11.2→5.0	35.7→▼13.9
	×	32.7→26.7	40.8→31.7	2.0→2.0	3.0→4.0
R3	◎	/		15.2→11.1	16.2→▲44.4
	○	61.6→70.7	34.3→△49.5	69.7→▽52.5	29.3→22.2
	△	/		10.1→△21.2	24.2→19.2
	×	38.4→29.3	65.7→▽50.5	5.1→△15.2	29.3→▽14.1

※6月より10%以上差異がある値は△（増加）か▽（減少）、20%以上なら▲（増加）か▼（減少）

表1から問題の意図及び差異が大きく出ている部分に着目すると、以下の3点を示すことができる。

- 1つめは、R4年度の①と②の正答率が近いことから、根拠をもって選択をすることができたことが伺える。2つめは、R3年度では減少傾向であった③が、R4年度では増加傾向であったことである。
- 3つめは、2年とも④が20%以上の増加傾向であることである。

R4年度の6年で増加傾向の児童らから、以下のような発言があったので示す。

- ・ 資料をよく読んで、的確に答えることができたようになった。
- ・ 読書量が増えたことで、読み取る力がついた。
- ・ 実力テストを通して、何となく読むのではなく、すみずみまで読むようになった。
- ・ 資料の大切なところはどこかなと考えながら読むようになった。
- ・ プラスチックのことを知らなかったが、知識が増えたことで、できるようになった。
- ・ （鯨っ子学習や作文練習を通して）言いたいことを端的に書くようになった。（そのため）何が必要かを考えるようになった。
- ・ とにかくたくさん書こうとしていたが、長すぎて伝わらないということがあり、ダラダラと書いていたところを直した。

問題を理解する読解力や文章力が上がったという児童の発言が多かった。先の3点と関連付けることができる。読書や学習を通して知識が増えたことを実感していることもあるが、鯨っ子学習等を通して、他者に伝えやすくする経験を通して、要点を捉える姿勢が身に付いていることが伺える。

最後に、各問題を1点（○）、2点（◎）として点数化した上での標準偏差（R4年度）をみると、6月と11月ともに1.46である。正答率が上がっている中で変化がないことから、一人一人が伸びていることが伺え、各自探究していく活動（鯨っ子学習）の効果との関連性があると考えられる。